

〈檀家を持たない寺院〉に対する「祈り」の諸相 —— 摩尼寺の事例を参考に ——

鈴木岩[※]弓

Aspects of the "Prayer" to the Buddhist Temple without Parishioners
— On the Case of MANIJI-Temple. —

Iwayumi SUZUKI

I. 問題の所在

本稿の目的は、現代日本人の仏教信仰の実態を、とりわけ「寺院」という宗教施設に対する人々の関わり（＝参詣の機会）に着目して把握し、その中から「寺院」の果たしている機能について若干の考察を行なおうとするものである。

現代人が仏教寺院へ信仰のために参詣する機会は数多くあるが、それらは大別して次の二種に分けられるものと思われる。それはまず「寺院主催の行事に参加する場合」で、もう一つはそのような機会とは無関係に、人々の側の都合によって関わりが決定される、「〈その都度的関わり〉が持たれる場合」である。このうち前者は、何らかの目的達成のために寺の側で設定した法会であるため、ここへの参加者の「祈り」はその目的に沿って限定されているものと推察される。これに対し後者では「祈り」の目的が限定されておらず、関わりを持つ側の自由選択に任されているものと考えられる。かかる観点からここ

では一つの仏教寺院を事例として取り上げ、そこへと人々が関わる場面を以上の二つの機会に分けて留意し、とりわけ、その際に捧げられる参詣者の「祈り」の内容に着目してその実態を探ることにはしたい。

ここで手がかりとする「祈り」というのは、これまで多くの学者・宗教者が指摘してきたことから明らかなように、あらゆる宗教現象において中心的役割を果たしてきた、人間と神的なるものとの関わりである。本稿ではこれを、特にその本質面から祈禱と供養に二分し、「祈り」の内容と人々の関わり¹⁾の関係を見ていくことになる。

ところで一言で「寺院」といっても、種々様々なものが見られる。それらに対する類型化については、多くの先学達も関心を払って来たが、ここではそれを檀家の有無の点から二分し、とりわけ〈檀家を持たない寺院〉を事例として考察を進めることにする²⁾。

ここで〈檀家を持たない寺院〉と呼ぶのは、〈檀家を持つ寺院〉と対をなす、筆者の考える現代日本の仏教寺院の一つのタイプである。この類型化を行なう上で決め手となる、「檀家」が日本仏教史の上に現れてくるのは近世

※ 島根大学教育学部社会科研究室

になってから、いわゆる「檀家制度」が開始されて以後のことと言われる。この制度に関しては、辻善之助の論考以来多くの研究が成されてきたが、そのような中、以下に引用する藤井学の指摘は、筆者がここで試みようとする類型化にとって示唆的な内容の記述となっている。

改宗・寺替を左右するのは、個々民衆の意志ではなくして、このように寺院と支配権力の意志にあったのである。だから、庶民が伝来の檀那寺を替えることは、「先祖より建来候宗旨、石碑等も之れ有る議、改宗致候事、容易ならず候」といわれるように、檀家制度が確立してくるにつれて実際にはほとんど不可能となったのである。このことは重要な意味をもつ。なぜなら、近世の民衆は、皮肉ないい方をすれば、生まれる前から宗旨と檀那寺をもっていたのである。宗旨と檀那寺は家伝来の不動のものとして、親から子へ、子から孫へと「家」に伝えられた。

(傍点は引用者。)

これより明らかなように、近世における「檀家制度」というのはあくまでもイエと寺との関係であって、そこには個人の選択の余地は全くなかった。この点現代においても大筋は同じで、この関係の解消、あるいは変更ということは、よほどの理由がなければ行なわれることはない。このような寺院が筆者の考える〈檀家を持つ寺院〉に相当するわけだが、藤井の指摘からも明らかなように、ここに見られる寺院と人々との関わりの特徴は、それが必ずしも個人の自由な選択によってなされるとは限らないところにある。

これに対して〈檀家を持たない寺院〉というのは、檀家制度が始まった近世以降、仏教

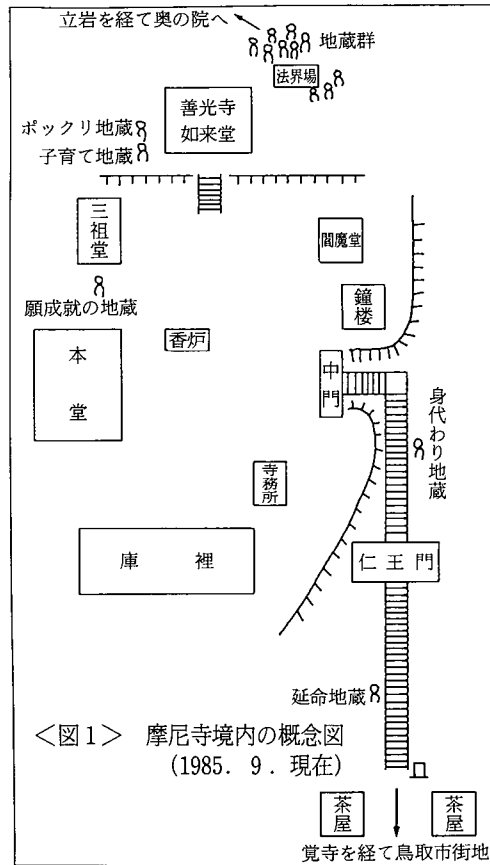
信仰がイエを背景とした葬式、年忌法要を専らとするいわゆる「形式化」の道を歩み始めた時期に、そのような制度から外れた旧仏教を中心とする寺院や、「檀家制度」が出来上がって以降に開かれた新地寺院という形で生まれてきた。このような寺院の多くは、現世利益を強調した靈驗譚などを伴って現出し、その寺独自の行事を行なうなどして、信仰心の裏付けの希薄な、当時の仏教信仰にあきたらない個人的救済を求める人々から、寺檀のワクを越えて急速に受容されるようになったという。つまり、この種の寺院に対する人々の関わり契機はイエとは直接関係なく、あくまでも個人レベルの信仰心に基づき、選択的になされていた点に特徴があるということができよう。

即ち、以上挙げた2つの寺院類型を対比的に述べてみるなら、〈檀家を持つ寺院〉においてはそこに対する関わりが、習俗化した儀礼などをも包摂した質的にも多様な機会になされているのに対し、〈檀家を持たない寺院〉においては、それが個人の信仰に基づいた自由な選択によりなされるものに限定される点が異なっており、さらにそこでの関わりはある程度明確な目的を持つものに限られる傾向があるものと考えられる。つまり前者での関わりがイエレベルで非選択的に持たれるのに対し、後者の場合には個人レベルで選択的になされているわけである。本稿におき、後者の事例を考察対象として取り上げる理由は、前者に見られるような質的にも多様な寺院への関わりを極力整理し、人々の寺院への関わりをできるだけ夾雑物なしに取り上げて分析の便を計りたいと考えるからに他ならない。以上のような目論見を持って、本稿では喜見山摩尼寺の事例を取り上げることとする。

II. 摩尼寺の概観

喜見山摩尼寺は、鳥取市東北部の山中に位置する天台宗の名刹である。⁴⁾ この寺の歴史の詳細は、現在までのところあまり明確ではない。現存する寺伝によるならこの寺は、帝釈天が天降ったといわれるこの地に、唐より帰国した慈覚大師が寺を建立したことにより始まったものとされている。しかし天正年中の秀吉による鳥取城攻撃の際に焼討ちにあつて焼失したため、このとき以前の文献記録は散逸している。またその後、寺が再建されて以後も領内の触頭であった淳光院末となって兼帯された時期や、安楽律僧の輪番となった時期があったりで、寺に残されている史料は決して多いものとはいえず、当時の寺の姿を知ることは困難な実状にある。そのような中、享保3年(1718)に同じ天台宗のうちでも戒律により厳しい安楽律の流れに属することとなって以後は、明治に至るまで修行道場の性格が強かったものと考えられている。⁵⁾ それ故、記録に見る限り、この寺が檀家を持ったことは一度もなく、さらにこの伝統は現代にも引き継がれており、＜檀家を持つ寺院＞には見られないような信仰習俗をこの寺に伝えることとなっている。

さてこの寺は「まにでら」と呼ばれることが多いが、その他に「まにさん」という呼び方もしばしば聞かれる。「まにさん」といった場合、この表現の中には、単に寺院としての摩尼寺を意味するのみならず、寺の位置する山名である摩尼山、寺の本尊である帝釈天といった意味などが混在して用いられている。更に近年では、門前にある山菜料理の茶屋が二軒、観光コースとして人気を集めているため、「まにさん」の名で、信仰とは無関係に山



菜料理を意味することも多くなっている。いずれにせよこのような呼び名からは、この地を訪れる人々の寄せる親しみの気持ちを窺い知ることができるものと思われる。

寺は門前の茶屋から更に三百余段の石段を登った摩尼山の中腹に堂宇を配しており、更にそこからは山頂にある立岩を経て、奥の院へと至る山道が続いている。(＜図1＞参照) この立岩というのが帝釈天の天降ったとされる巨岩であるが、実際、今でもこの岩の上には帝釈天をかたどったとされる風化した石の塊が見られ、賽銭があげられている。またこの岩の周りには西国巡礼の観音像などが数多く祀られているが、ここに見られるように摩尼寺では、参道沿いを中心に山内の至るとこ

ろに数多くの石像や石塔が祀られている。これらの石像・石塔は、何れもこの寺へと参った人々の信仰の証として奉納されたものであるが、中でも特に、「法界場」と呼ばれる善光寺如来堂裏手の奥の院への登り口付近では、石造りの地藏像や死者の戒名の刻まれた石塔などが数多く納められている。

Ⅲ. 寺院行事の際の「祈り」

現在、摩尼寺で行なわれている寺院行事についてまとめてみると、〈表1〉のようになっている。これらの中には、他の多くの仏教寺院でも同様に行なわれている行事も見られるが、摩尼寺独自なものもまたいくつか見られる。このように独特な行事が見られることこそ、〈檀家を持たない寺院〉の特質となることは先に述べた通りである。従って、かかる寺院でより多くの参詣者を集めるのは、結局この種の行事になるものと思われる。そこで本稿においては、そのような行事の事例として、「位牌施餓鬼会法要⁶⁾」と「へちま加持修行」を取り上げ、それぞれにおける参詣者の関わりを見て行くことにしたい。

1. 「位牌施餓鬼会法要」

〈表1〉より明らかなように、摩尼寺で「位牌施餓鬼会法要」が催されるのは年二回、四月と十月の第三日曜日においてである。この法会は、文字どおり使われなくなった位牌の供養を目的としたものであるが、位牌の他にも古くなった御守護札、人形、壊れた仏具、黒枠の付いたままの遺影、果ては使われなくなった仏壇一式といった具合に、とりわけ宗教に関連した不用物の供養が同時になされている。

まずはじめに、筆者が観察した昭和58年春と秋の法会の模様を概略する。法会の名称に

〈表1〉摩尼寺の年中行事

1 / 1～3	初詣
1 / 16	六道絵拝観
2 / 15	涅槃会法要
3 / 17～	春季彼岸会法要
3 / 21	六道絵拝観
旧4 / 8	花まつり
4月第3日曜日	春季位牌施餓鬼会法要
7 / 16	六道絵拝観
7 / 26～28	帝釈天会式
旧8 / 15	へちま加持修行
8 / 16	六道絵拝観
9 / 20～	秋季彼岸会法要
9 / 23	六道絵拝観
10月第3日曜日	秋季位牌施餓鬼会法要
12 / 8	針供養
旧12 / 8	八日吹供養
12月第3日曜日	おたき
12 / 31	除夜の鐘

「施餓鬼会」とあることから明らかなように、この儀礼ではまず、本堂において住職の司祭のもと「光明供施餓鬼」が修せられる。その際には天台宗の儀軌に則って、本堂内の須弥壇と向い合う形で施餓鬼棚が設けられ、五如来幡等で飾り付けられることとなる。この儀礼の意味するところは、他宗でも行なわれている「施餓鬼会」と同様に、まず餓鬼に飲食を施し、この法会の本尊である五如来の威光を借りて、餓鬼の持つ無量の罪を滅し、無量の福を生じることで、餓鬼を仏となすというものである。そしてさらにこの場合、餓鬼に対する善根功德を回施して、ここで供養される位牌自体およびそこに象徴された近親者や先祖代々の人々の滅罪追福が修せられることになる。

本堂での儀礼が終了すると、舞台は境内の一角に一時的に設けられた焼却の場に移される。この場所は毎回必ずしも決まっているわけではないが、前もって清められ、四方を青

竹で囲み、注連縄をめぐらした結界が構成されている。この中に、それまで本堂に安置してあった供養のための位牌などが積み上げられ、僧侶達の読経の中、火がかけられることになる。参詣者はその周りを取り囲み、炎に包まれた位牌などの山に祈りを捧げるが、やがて三々五々帰途につき儀礼は終了する。

かかる法会の由緒については不明の点多々あるが、本堂内で施餓鬼を実施する現在の形が定式化されたのは意外に新しいことで、ここ20年ぐらいのことと推定される。ただそのような形式が定着するようになった背景には、近世以来この寺に対して持たれてきた〈法界場を供養の場とする信仰〉があって、この信仰に何らかのきっかけにより、位牌を納める習俗が習合した結果現在の形態が定着したものと考えられている。

さて次に、この法会の際の控えである「御回向申込書」の綴り（以下『回向控』と略記）を参考に、この法会参加者の姿を見て行くことにしたい。これまで見た昭和55年春から58年秋までの『回向控』からは、毎回150件から250件の位牌供養の依頼が確認されたが、そこにみられる特徴として、自然条件のよい夏場に持参された位牌などを供養する秋の法会の依頼数が、春に比べて常に多い点が指摘できる。ここでは昭和58年4月18日から10月16日受付のものまで、総計231件の依頼を考察の対象とする。

まずこの時に依頼した人々の性別、年齢別構成をまとめてみるなら〈表2〉を得る。これらのうちで明らかになるものに限った平均年齢は、男57.7歳、女59.3歳となっており、中高年齢者が多いことが明らかになる。また男女比において、男の比率の方が高くなっているのは、後述するように実際に本人が参詣

したかどうかは別として、イエの代表として、家父長の名前で近親者の供養を依頼している場合が含まれているためと考えられる。

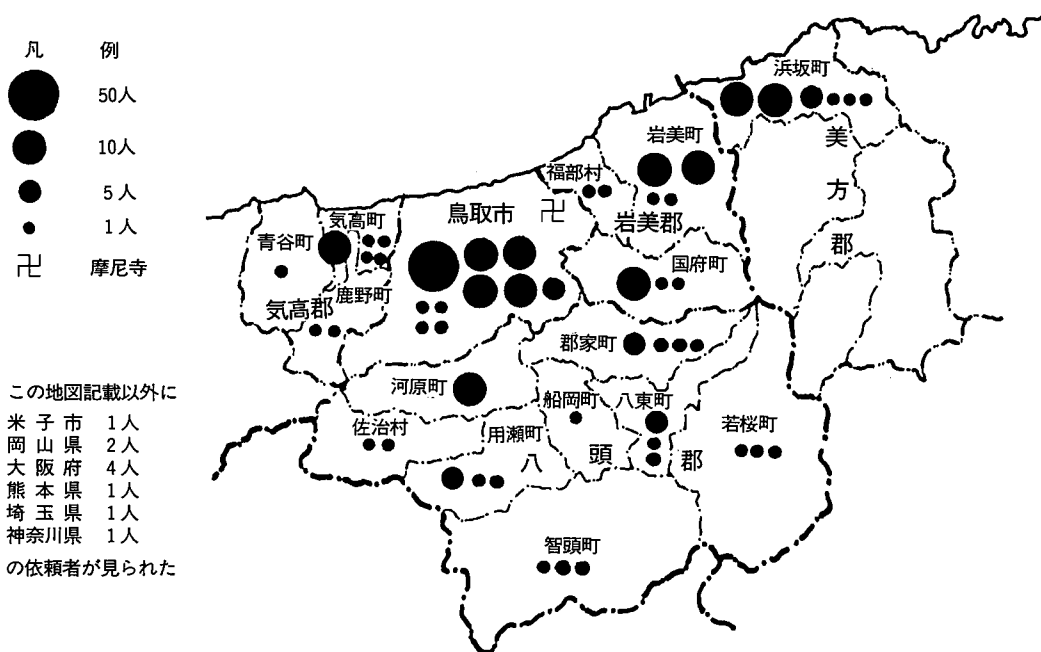
〈表2〉『回向控』にみる依頼者

年 齢	男	女	合 計
0 ～ 9			
10 ～ 19			
20 ～ 29	5		5
30 ～ 39	10	2	12
40 ～ 49	14	5	19
50 ～ 59	48	6	54
60 ～ 69	19	14	33
70 ～ 79	5	4	9
80 ～	3	1	4
不 明	68	27	95
合 計	172	59	231

(単位：人)

さらに『回向控』のデータで特筆すべきは、施主の居住地域、いわゆる信仰圏があげられる。これを図示した〈図2〉によると、地元鳥取市を中心に、岩美郡・八頭郡・気高郡を加えた旧因幡国の合計で、全体の83.5%、193件にのぼり、またここに、旧但馬国ではあるが兵庫県美方郡浜坂町からの依頼を合計すると、全依頼者の95.7%もの高率を示すことが明らかになる。浜坂町から依頼の多い理由は明らかでないが、この法会に関し、この町は旧因幡国と同列に考えることができるものと思われる。このように、信仰圏にある程度明確な地域性が示される点は、この法会の一つの特徴を示すものと考えられよう。

そこで更に、以上の法会に参集する依頼者の姿を、いま取り上げた依頼に応じて開催された、昭和58年10月16日の「秋季位牌施餓鬼会法要」の際、筆者が参詣者の一部に対して実施したアンケート調査の結果からみることにする。この日、本堂に上がった人々は179名



<図2> 『台帳』にみる位牌供養依頼者の居住範囲

であったが、その他この法会とは無関係に寺へ参詣する人々も見られ、結局法会前後におよそ200人程の参詣者があったものと考えられる。この時得られた回答は41件であったため、これは全参詣者の20%程度のサンプルと推定される。

これよりも、参詣者の性別・年齢別構成をまとめてみると、<表3>を得る。このうち年齢の明らかな者の平均を求めてみると、男52.2歳、女52.4歳となり、前述した『回向控』に示された年齢に比べ若干若くなっていることが明らかになる。ただ男女比に関しては、『回向控』とは逆に女の方が多くなっているが、この点は先にも触れたように、台帳記載は一家の代表である家父長名ですが、直接依頼にくるのは主婦などの女である場合が数多く見受けられるためと思われる。

これらの人々の居住範囲については、<表4>のようにまとめられる。ここからも『回

<表3> アンケート調査にみる「位牌施餓鬼」時の参詣者

年 齢	男	女	合 計
0 ~ 9			
10 ~ 19			
20 ~ 29	1	1	2
30 ~ 39	1	3	4
40 ~ 49	2	5	7
50 ~ 59	3	10	13
60 ~ 69	1	5	6
70 ~ 79	2	1	3
80 ~		1	1
不 明	1	4	5
合 計	11	30	41

(単位:人)

向控』に見られたのと同様な傾向が読み取られ、この法会に参加する人々にはある程度明確な地域性が確認できるものといえよう。

依頼者のイエの宗教については<表5>のように整理できるが、更にこのような寺院を檀那寺として持ちながら、他方で黒住教・生

＜表4＞インフォーマントの居住地

居住地	人数	%
鳥取市	19	46.3
岩美郡岩美町	9	22.0
八頭郡河原町	1	17.1
八東町	1	
若桜町	2	
佐治村	1	
智頭町	2	
気高郡気高町	2	4.9
兵庫県浜坂町	3	7.3
養父町	1	2.4
計	41	100.0

＜表5＞インフォーマントの宗派

宗派名	人数	%
天台宗	5	12.2
真言宗	3	7.3
浄土宗	6	14.6
臨済宗	3	7.3
曹洞宗	24	58.6
計	41	100.0

但し真言系には真言宗及び高野山真言宗を、また臨済系には妙心寺派及び天竜派を含むものとする。

長の家などに関わりを持っている人も若干確認された。これらより、摩尼寺参詣者の宗旨は摩尼寺と同じ天台宗に限定されるものではなく、超宗派的な人々の関わりを受け入れてこの法会が開催されていることが明らかになろう。このような性格こそ檀家を持たない寺院＞の特質というべきものであろう。

さてこれらの人々のうちで、この半年のうちに位牌を摩尼寺に持参した人々は25人確認され、全部で32本の位牌が持ちこまれた。これを形態の上から見ると、22本が死亡直後に作られる「白木位牌」で、残り10本がそれと交換に作られる「漆塗り位牌」であった。こ

のように位牌を摩尼寺へと納める契機には、前者に対しては「四十九日までに位牌を新しくして、仮の位牌は摩尼さんに納めるものだ」（岩美郡岩美町、女、58歳）、そして後者に対しては「五十回忌が済んだり、古い位牌を一つにまとめるなどして不用になった位牌は摩尼さんにおさめるものだ」（市内、女、52歳）という当該地域に広まっている＜伝承＞の存在を指摘できる。

また、持参した位牌と施主（持参者）との関係を見ると、＜表6＞のようになっており、世代深度があまり深くないことが明らかになる。この点は、この法会があくまで位牌を媒介にした法要であり、抽象化された「先祖」の供養というよりむしろ、位牌に象徴される具体的故人の供養をその中心的な目的としているためと思われる。

＜表6＞位牌とその施主との関係

施主との関係	位牌の本数
夫	2
両親・子供（一親等）	20
祖父母・孫（二親等）	4
先祖	6
合計	32

回答のあった41名中、いま述べた25名以外の16名は、この半年間に位牌を持参しないままこの日摩尼寺に参詣したわけであるが、その理由については以下のようなになる。まずこのうちで法会に参加したのは9人で、残り7人は「観光できた」（市内、男、23歳）、「下の茶屋に山菜料理を食べにきたが、混んでいて入れないので時間潰しにきた」（市内、男、38歳）といったように観光目的で参詣した人達であった。法会に参加した9人の人々は、その大半が以前位牌を納めたことがあり、今回

の法会に参加する目的も、その時の位牌の供養のためとするものであった。そしてただ一件、これまで位牌持参の経験がないままに法会に参加していたのは、位牌を作らなかった水子の供養のためとするものであった。

このように見てくると、「位牌施餓鬼会法要」に参加する者はいずれも、寺の側で設定した目的、つまり位牌あるいは位牌などに象徴された「故人の供養」を目的として参集しているものと見なすことができよう。

2. 「へちま加持修行」

「へちま加持修行」は、別名「ゼンソク平癒祈禱」と呼ばれていることから明らかなように、ゼンソク平癒の祈願を目的として開かれる、摩尼寺における最大規模の法会である。この寺で、この法会が催されるようになった経緯は明らかではないが、明治43年に陽暦に改正した際の寺の年中行事一覧である、「摩尼寺帝釈天修行記」にはこの法会の名前は挙がっていない⁸⁾。この法会自体はそもそも天台宗の中でも安楽律の流れを引く寺にのみ伝えられている秘法で、伊勢と江戸に住む二人の僧が、同日同時刻に夢を見てこの法を地藏より教わったものといわれている⁹⁾。

法会が催されるのは、これを行なう他の天台安楽律系の寺院と同様旧暦8月15日と決まっているが、この日の摩尼寺境内は、早朝より一日中参詣者で混雑する。参詣者はまず、庫裡脇に設けられた受付で、所定の用紙に住所・氏名・年齢を記入し、それを輪切りにしたへちまに糊で張り付ける。法会は早朝6時すぎより繰り返し行なわれており、参詣者はそのへちまを本堂に持って行きそこで加持してもらうことになる。祈禱後には、御守護札、御符、へちま形のお守り、「心得書」、写仏案内とその見本・用紙が1セットになったもの

が袋づめになって配布されるが、そのうち「心得書」によると参詣者は以後次のように心がけねばならないことになる。

まず帰宅後に、摩尼寺の本尊である帝釈天の前で祈禱されたへちまを、人の踏まぬ場所に横にして埋め、その上に目印をつけておく。翌朝より21日間、毎朝これに清浄な水を供え、光明真言「オンアモキヤ、ビルシャナ、マカモドラマニハンドマ、ジンバラ、ハラバリタヤウム」を108遍唱えて拝む。拝み終るとその水を少し飲み、残った水は全部埋めたへちまの上に注ぎかける。この間一日たりとも休むことは許されないが、毎朝このことを行なうとへちまが帝釈天と信者が一体となって、へちまが土中で腐ると同時に、へちまに封じ込まれたゼンソクが消えてなくなるものと考えられている。

以上のように行なわれる「へちま加持修行」であるが、実際ここに参集する参拝者の間からは、この法会の御利益が本来のゼンソク平癒のみならず、「頭のゼンソク」、「腰のゼンソク」などというように、ゼンソクの意味が拡大解釈されて病氣平癒全般に適用される傾向がみられる。そのためかかる参詣者のニーズに答えて、最近では寺の側でもこの法会を「諸病平癒祈禱」と呼ぶ場合も見られる。

さて次に、この法会の際の祈禱受付の控え（ここでは『祈禱控』と略称する）を参考に、法会参加者の姿を見て行くことにしたい。ここで取り上げるのは、昭和57年10月1日に開催された「へちま加持修行」で、総計1,143件の依頼がその対象となる。この日は朝7時ごろまで小雨模様で、かつまた平日の金曜日であったため、例年の依頼者数に比べ若干その数が少なかったものといわれる。

まず、この資料から明らかになる参詣者の

姿をまとめてみるなら、＜表7＞、＜表8＞のような構成となる。このうち性別に関しては、男女ともほぼ同数で差異は認められず、この法会の目的が性差に影響を受けるものではないことが明らかになる。年齢に関しては、それが明らかなる者に限って言えば、男は1歳から84歳に亘り平均34.3歳、女は同じく1歳から90歳までで平均43.0歳となる。このうち

＜表7＞ 『祈禱控』にみる依頼者

年 齢	男	女	合 計
0 ～ 9	139	92	231
10 ～ 19	85	60	145
20 ～ 29	48	39	87
30 ～ 39	50	38	88
40 ～ 49	40	47	87
50 ～ 59	85	111	196
60 ～ 69	69	108	177
70 ～ 79	45	64	109
80 ～	2	13	15
不 明	3	5	8
合 計	566	577	1,143

(単位：人)

＜表8＞ 『祈禱控』にみる依頼者の居住地

居 住 地	人 数	居 住 地	人 数
鳥 取 市	179	愛 媛 県	1
岩 美 郡	64	兵 庫 県	39
八 頭 郡	46	大 阪 府	25
気 高 郡	24	奈 良 県	3
米 子 市	187	京 都 府	4
倉 吉 市	38	和 歌 山 県	1
境 港 市	10	滋 賀 県	4
東 伯 郡	89	愛 知 県	2
西 伯 郡	253	山 梨 県	1
日 野 郡	2	神 奈 川 県	4
小 計	892	東 京 都	17
島 根 県	70	千 葉 県	2
広 島 県	10	埼 玉 県	5
岡 山 県	61	栃 木 県	1
香 川 県	1	合 計	1,143

1歳では、本人が『祈禱控』に記入することは不可能であるため、記帳内容には当然、自利の祈りのみならず、子供のゼンソク平癒を願う利他の祈りも混在しているものとみなされよう。全般的傾向として、この法会参加者は「位牌施餓鬼会法要」の参加者に比べ若い層の人々が多くなっているものと考えられる。

参詣者の居住地については、地元の鳥取市を抜いて県西部の米子市からの依頼者が最も多く、旧伯耆国からの依頼を合計してみると、全依頼者の50.7%、579件をしめていることが明らかになる。ちなみに旧因幡国からの合計が313件で全体の27.4%でしかなく、また県外からの依頼者が全体の21.9%をしめているなどのことから、この法会に参集する人々が「位牌施餓鬼会法要」の参加者とは異なり、広い信仰圏を形成していることが注目される。

そこで次に、いま見たような傾向の背景を、法会参加者に対するアンケート調査の結果から考察することにする。ここで用いるデータは、昭和60年9月29日に行なわれた「へちま加持修行」の際の調査で回答を得た132件である。この日は日曜日であったものの前日より激しい雨が降り、当日もぐずついた天気であったため、例年に比べて参詣者は少なかったものと思われる。

さてこの資料から明らかになる参詣者の居住範囲は＜表9＞のようになる。ここからも『祈禱控』の結果と同様、性差は特に認められず、旧因幡国に比べて旧伯耆国を中心にした他地域からの依頼が多いことが明らかになる。このうち年齢の明らかなる者の平均は、男50.0歳、女55.5歳となり、『祈禱控』に見られる数字よりずっと高くなっていたが、これはインフォーマントに子供を入れなかった結果と思われる。

<表9> アンケート調査にみる「へちま加持修行」時の参詣者居住地

居住地		男	女	合計
鳥 取 県	鳥 取 市	8	11	38
	岩 美 郡	2	2	
	八 頭 郡	7	6	
	気 高 郡	2	—	
小 計	米 子 市	8	15	60
	倉 吉 市	3	6	
	境 港 市	—	1	
	東 伯 郡	3	4	
	西 伯 郡	11	8	
	日 野 郡	1	—	
小 計		45	53	98
島 根 県	4	4	8	
岡 山 県	4	—	4	
兵 庫 県	3	1	4	
大 阪 府	1	—	1	
京 都 府	—	2	2	
福 井 県	3	1	4	
不 明	2	9	11	
合 計		62	70	132

(単位：人)

<表10> アンケート調査にみる「へちま加持修行」時の参詣者のイエの宗教

宗 派 名	人 数	%
天 台 宗	4	3.9
真 言 宗	9	8.8
浄 土 宗	14	13.7
浄 土 真 宗	5	4.9
臨 濟 宗	3	2.9
曹 洞 宗	57	56.0
黄 檗 宗	1	1.0
禪 宗	5	4.9
日 蓮 宗	4	3.9
合 計	102	100.0

またインフォーマントに見られる、イエの宗教に関しては<表10>のようになる。ここより明らかのように、この日の参詣者の場合

も「位牌施餓鬼会法要」の時と同様に、超宗派的な人々により構成されていたことが示されている。

次にそれらの人々の、参詣目的を確かめたところ全体の25.0%にあたる33人は、当日が「へちま加持修行」であることを知らずに来たものであった。このうち観光やこの法会に参加した家族の付添いとして来た者が16人あった他、「四十九日が済んで位牌を納めに」（気高郡気高町，男，54歳）、「先祖供養のため」（八頭郡若桜町，男，67歳），そしてまた「写経を納めに」（市内，女，64歳）といったように、当日の法会の目的とは全く無関係の個人レベルの「祈り」のために、<その都度的関わり>として参詣していた者が17人あった点は注目すべきものと思われる。この点、当日が日曜日であったことが多少影響していたものと推測されよう。

これに対し、法会参加を目的として参詣した残りの97人は、いずれもゼンソク平癒あるいは病氣平癒を祈りに来た者で、ここからも法会参加を目的とする参詣者は、一応その法会の目的に則った関わりをしていることが明らかになる。

これらの人々の参詣の契機については、回答のあったすべてが知人・友人からの紹介をあげていたが、かかる参詣者が、過去3年間いかなる機会に摩尼寺を訪れたかに関しては、<表11>のようになる。この結果まず、盆に来た1人を除くと、供養に関連する機会にこの寺へ参詣したのは、すべて旧因幡国の人々に限定されることが明らかになる。その中では、とりわけ彼岸の際の参詣が多いことがわかるが、理由としては「彼岸には先祖を迎えに摩尼寺へ行くものだ」（市内，女，70歳）という、当該地域に広まっている<伝承>を指

＜表11＞ 「過去3年間の参詣の機会について」

(「へちま加持修行」時アンケート調査：複数回答)

居住地	「へちま 加持修行」	彼岸	盆	位牌施餓鬼	納経	観光
鳥取市	7	7		1	1	4
岩美郡	1	1			1	
八頭郡	1	6				1
米子市	17		1			2
倉吉市	5					1
境港市	1					
東伯郡	5					
西伯郡	7					1
日野郡	1					
島根県	7					2
岡山県	3					
兵庫県	2					
合計	57	14	1	1	2	11

＜表12＞ 「摩尼寺の利益は？」

(「へちま加持修行」時アンケート調査)

居住地	ゼンソク 平癒	病氣平癒	供養全般	先祖供養	故人に 会える
鳥取市	6	2	3	1	
岩美郡		1		1	
八頭郡	1		1	3	1
米子市	19				
倉吉市	5				
境港市		1			
東伯郡	4				
西伯郡	11	1			
日野郡	1				
島根県	6	1			
岡山県	4				
大阪府	1				
合計	58	6	4	5	1

摘することができる。これに対し旧因幡国以外の地域にあっては、観光を除くと、「へちま加持修行」の時にのみ摩尼寺と関わりを持つ人々が圧倒的に多いことが判明する。

そこでさらにこれらの参詣者に対し、それぞれの考える摩尼寺の利益を尋ねた結果＜表12＞の回答を得た。ここでゼンソク平癒、病氣平癒を指摘した人々が全体の86.5%

に上がっているのは、この調査が「へちま加持修行」当日実施されたので当然ともいえるが、それにもかかわらず供養関係の利益をあげた人が10人おり、それがすべて旧因幡国在住者に限定された点は、興味深いことと思われる。

以上、摩尼寺における供養を目的とする法

会と、祈禱を目的とする法会の代表的な事例をとりあげ、この寺に対する人々の関わりについてその実態をまとめてみた。その結果、まず法会に参加する参詣者の「祈り」は、初めに予想した通りその法会自体の目的に合致したものに限定される傾向が見られた。しかし同じく摩尼寺に関わるといっても、ゼンソ

ク平癒・病氣平癒を中心にした祈禱の「祈り」はどの地域からもなされていたのに対し、供養の「祈り」は旧因幡国出身者にほぼ限定されてなされていたことが明らかになり、「祈り」の内容に地域性が見られることが明らかになったわけである。そこでこの点を踏まえた上で、次に摩尼寺に対する〈その都度的な関わり〉について見ていくことにする。

IV. 〈その都度的関わり〉 の際の「祈り」

1. 「写経」感想文

まずここで、摩尼寺に対する〈その都度的関わり〉の事例として取り上げるのは、摩尼寺で主催している「摩尼寺復興百万巻写経」

(以下「写経」と略称)に書かれた感想文である。摩尼寺におき「写経」運動が始まったのは、昭和55年12月からであるが、この目的は写経という教化活動を通じて、境内にある諸堂再建のための浄財を集めることにあった。

ここでの「写経」の場合、各自が自宅において書写した『般若心経』を摩尼寺に納めるのであるが、そのやり方は納経者自身の判断に任されており、一度限りの納経が見られる他、ある期間かけて10巻、25巻、50巻などと目標の巻数納経する願掛け的な形で行なわれる場合も多く見られる。

ここで分析の資料としようとするのは、納経時に書写した『般若心経』と共に納める用紙で、それには住所、氏名、年齢、願い事など自由な感想記入欄が設けられている。このうちまず性別・年齢の明らかな者を延べ人数でまとめてみると、〈表13〉のようになる。このうち年齢の明らかな者に関しては、男は1歳から86歳までで平均44.2歳、女は1歳から82歳までで平均46.6歳となっていた。1歳

〈表13〉納経者の性別年齢別構成

年 齢	男	女	合 計
0 ～ 9	26	6	32
10 ～ 19	10	10	20
20 ～ 29	28	109	137
30 ～ 39	44	107	151
40 ～ 49	50	197	247
50 ～ 59	80	235	315
60 ～ 69	77	175	252
70 ～ 79	23	53	76
80 ～	5	3	8
不 明	24	34	58
合 計	365	928	1,293

(単位：人)

の納経があることから、ここでも利他の「祈り」が含まれていることが明らかになるが、実際に納経する者では、小学生ぐらいから字の練習を兼ねて行なう場合も見られ、供養の法会の際などに見られたのとは異なり、年齢幅が広がっていることが注目される。またここで顕著な特徴として、男に比べ、女の納経者数が多く、倍以上に及んでいることがあげられる。そのような傾向の生じる理由は明らかではないが、一つには25巻、50巻というように、多くの巻を願掛け的に納経する事例が、女性に多く見られるということが指摘できよう。

次にそれらの人々の居住範囲については、〈表14〉のようになる。これより旧因幡国からの納経者のみで全体の61.3%、鳥取県全体で73.6%にのぼっていることが明らかになる。つまり納経という形態をとった「祈り」は、これが始まってまだ間がないということもあって、地元である県内からの関わりが多いものと思われる。なおここで兵庫県と大阪府からの納経者が多いのは、兵庫に住む住職の親戚が近所の人に対して写経を勧めているた

＜表14＞「写経」感想文に見る納経者の居住範囲

			男	女	計				男	女	計				男	女	計
鳥取市	114	430	544	}	792	岡山県	9	8	17	滋賀県	1		1				
岩美郡	40	68	108			広島県	9	7	16	三重県			1	1			
八頭郡	25	76	101			山口県	2		2	愛知県			1	1	1		
気高郡	9	30	39			福岡県		1	1	静岡県				1	1		
米子市	6	62	68	}	167	大分県	1	1	2	神奈川県			5	5			
倉吉市	4	25	29			香川県	1	1	2	東京都	5	6	11				
境港市	1		1			徳島県		1	1	埼玉県	2	1	3				
東伯郡	24	29	53			兵庫県	54	70	124	茨城県			2	2			
西伯郡	6	6	12	大阪府	19	60	79	秋田県				4	4				
日野郡	2	2	4	京都府	4	2	6	オーストラリア					1	1			
小計	231	728	959	和歌山県		3	3	不明					1	1			
島根県	27	20	47	奈良県		3	3	合計	365	928	1,293						

＜表15＞納経者に見る居住地別「祈り」

	鳥取市	岩美郡	八頭郡	気高郡	米子市	倉吉市	東伯郡	西伯郡	日野郡	島根県	岡山県	広島県	福岡県	兵庫県	大阪府	京都府	和歌山県	東京都	秋田県	合計
具体的供養	22		19	2	3					2	1	1			2				1	53
先祖供養	22	2	1		3		3		1	1		1		1	3					38
水子供養	11	7	4	1	2	1	1				4	2	1							34
ゼンソク平癒		2			2		1	4							2					11
病気平癒	13	6	3	3	3	3	3	1				2		6	2	1		5		51
家内安全	3	2			3			1		2				1	2				1	15
健康祈願	3	1			2							1		1						8
良縁祈願	2		1		1															4
子授けて			3																	3
子育て	12				1		1				1			2						17
安産			10																	10
学業成就										1										1
合格祈願								1												1
就職祈願	3																		1	4
商売繁盛	1																			1
工事安全					1															1
厄除け	1				1							1			1					4
開運												1								1
子孫繁栄	1																			1
延命長寿												1								1
ポックリ	1					1														2
願望成就	3						1			3					1		1			9
摩尼寺復興	11	1	1		2		1			1				1						18
小計	109	34	29	6	24	5	12	6	1	10	6	10	1	14	10	2	1	6	2	288

めであり、またこれまで以上に広い範囲から関わりが見られるのは、何らかの手段でこの方法を知った人々が郵送で納経する場合が見られるためである。

さて以上の納経者のうち、感想記入欄の記述からその「祈り」が明らかになる者は、男77名、女211名の合計288名であった。そこでその「祈り」を居住地別にまとめてみると前ページの<表15>となる。ここに見られる「祈り」の内容は、前述した「位牌施餓鬼会法要」と「へちま加持修行」の際に寺院主催で祈られた「祈り」の内容で半数以上をしめており、この写経運動の趣旨にあった「摩尼寺復興」を願う「祈り」の他、多くの現世利益の「祈り」がなされていることが明らかになる。そしてさらにこれらの「祈り」をまとめて、居住地に留意しながら、供養・病氣平癒祈願・その他の祈願に分類、整理してみるなら、<表16>となる。供養を目的とした旧因幡国からの納経件数は、ここでも他地域に比して多いことが明らかになり、またこれとは逆に、病氣平癒祈願は旧因幡国だけではなく、むしろ他地域からの件数の方が多いことが判明する。

<表16>納経者に見る地域別「祈り」

地 域	供養	祈 禱		合計
		病氣平癒	それ以外	
旧 因 幡 国	91	27	60	178
旧因幡国以外	34	35	41	110
合 計	125	62	101	288

また「祈り」の内容を男女別で整理してみると、<表17>のようになっており、男に比して女が供養を目的に納経する傾向が高いことが明らかになる。

<表17>納経者にみる性別「祈り」

	男	女	合 計
具体的供養	5	48	53
先祖供養	9	29	38
水子供養	5	29	34
ゼンソク平癒	9	2	11
病氣平癒	24	27	51
家内安全	5	10	15
健康祈願	2	6	8
良縁祈願		4	4
子 授 け		3	3
子 育 て	1	16	17
安 産		10	10
学業成就		1	1
合格祈願	1		1
就職祈願	2	2	4
商売繁盛		1	1
工事安全		1	1
厄 除 け	1	3	4
開 運	1		1
子孫繁栄	1		1
延命長寿		1	1
ポックリ		2	2
願望成就	4	5	9
摩尼寺復興	7	11	18
合 計	77	211	288

以上、参詣者の側の自由な選択によりなされているはずの、写経感想文に現れた摩尼寺に対する「祈り」の中からは、どちらかというところ、寺院行事の目的に即した「祈り」の内容が主流を占めていることがわかった。そしてそこでも法会の時と同様に、病氣平癒を中心とした祈禱は広い地域に分布を示しているのに対し、供養は旧因幡国に限定されるといった法会の時の傾向に通じる様な地域性が認められた。さらにまた、祈禱と供養の「祈り」自体の内容によっても、性差が見られることが明らかになったわけである。

2. 「常置アンケート」

次に取り上げる「常置アンケート」という

のは、摩尼寺本堂に常置している、筆者が作成したアンケート用紙による調査をさす。この調査は、何らかの「祈り」を目的として本堂に上がった人々を対象として、住職が準備をする合間に回答を記入してもらうよう依頼しているもので、住職の多大なご協力のもとに実施している調査である。わざわざ本堂に上がってなされるような「祈り」には、深刻で切実な、他人には知られたくない内容のものも多いものと思われる。従ってここで対象とする、昭和60年1月25日から8月15日まで得られた66人の回答というのは、期間中、本堂に上がったすべての人からのものではなく、それらの一部の人々のデータということになる。

まずこれらの人々の性別と居住範囲については、＜表18＞となる。これより旧因幡国からのみで55人、83.3%もの人々が参集していることが明らかになる。このような結果を生む理由としては、まずこの地域が摩尼寺と距離的に近いことがあげられるが、その背後に、「このお寺は、因幡第一のお寺だ」（市内、男、58歳）といった＜伝承＞に示される、身

近な意識の存在を指摘できるものと思われる。

＜表18＞常置アンケートにみる参詣者

居 住 地		男	女	合 計
鳥 取 県	鳥 取 市	14	26	55
	岩 美 郡	4	4	
	八 頭 郡	3	1	
	気 高 郡	1	2	
鳥 取 県	倉 吉 市	1	1	7
	東 伯 郡	1	2	
	西 伯 郡	1	—	
	日 野 郡	—	1	
小 計		25	37	62
兵 庫 県		—	1	1
大 阪 府		1	1	2
東 京 都		—	1	1
合 計		26	40	66

＜表19＞常置アンケートに見る参詣者のイエの宗教

宗 派 名	人 数	宗 派	人 数
天 台 宗	6	曹 洞 宗	15
真 言 宗	1	日 蓮 宗	2
浄 土 宗	5	天 理 教	1
浄 土 真 宗	7	黒 住 教	1
臨 濟 宗	1	不 明	27
合 計		66	

＜表20＞常置アンケートにみる「祈り」の内容と居住地（複数回答、カッコ内は女の内数）

居住地	供養	先祖供養	位牌供養	水子供養	ゼンソク平癒	病氣平癒	厄除	家内安全	合格	良縁	安産	ポックリ	当選	合計
鳥取市	11(8)	6(5)	5(2)	12(0)		4(3)	2(1)	5(3)	1(1)	2(1)	1			49(34)
岩美郡	3(3)		1(1)	1(1)		3(1)						1		9(6)
八頭郡	2		1	1(1)										4(1)
気高郡				2(1)			1(1)	1(1)		1(1)				5(4)
倉吉市				1(1)									1	2(1)
東伯郡					2(2)	1								3(2)
西伯郡					1									1
日野郡					1(1)									1(1)
兵庫県				1(1)										1(1)
大阪府					1		1(1)	1(1)		1(1)				4(3)
東京都			1(1)											1(1)
合 計	16(11)	6(5)	8(4)	18(15)	5(3)	8(4)	4(3)	7(5)	1(1)	4(3)	1	1	1	80(54)

これらの人々のうち、年齢が明らかなものに関しては、男8歳から74歳で平均46.2歳、女7歳から84歳で平均41.4歳となっていた。

またそれらの人々のイエの宗教に関しては、<表19>のようになっており、ここからもまた、摩尼寺へ関わりを持つのが超宗派的な人々であることが明らかになる。

ではこれらの人々は、何を目的にこの寺へと参詣したのであろうか。この点を整理したのが<表20>であるが、これによると「具体的な故人の供養」に始まり、「選挙の当選祈願」に至るまで、多様な「祈り」がなされていることが明らかになる。そしてまた、ここからも供養の「祈り」を捧げるのが男に比べ、女に顕著であることがはっきりし、「祈り」の内容による男女差が指摘できた。さらにこのような「祈り」の内容を信仰圏との絡みで見えていくと、ここでもまた地域性が顔を覗かせていることが明らかになる。即ち、供養に関する「祈り」はその大半が旧因幡国の人々から寄せられたものであったのである。ちなみに、この地域以外からなされた供養の「祈り」は3件のみであったが、このうち東京からのものは鳥取市出身者による位牌供養のための参詣であり、また兵庫のものも、「位牌施餓鬼会法要」に多くの参詣者を出す美方郡浜坂町からのものであった。これより、供養の「祈り」は、参詣理由の詳細が不明な倉吉市からの水子供養1件を除くなら、「位牌施餓鬼」時と同様、すべて旧因幡国に関連した人々により祈られているということになる。

これに対し祈禱関係の「祈り」に関しては、明確な特徴は見出しがたいが、とりわけゼンソクを含む病氣平癒の祈りは全地域からなされていることが明らかになる。

このような「祈り」を摩尼寺に対して行な

う契機について特筆すべき点は、旧因幡国以外の地域からの回答では、知人・友人から聞いたとする者が全てであったのに対し、旧因幡国ではそのようなパーソナル・コミュニケーションに加えて、オガミヤと呼ばれる民間宗教者から参詣を促されたことを回答する者がしばしばみられることであった。ちなみに今回のアンケートからはそのような回答が15件見られたが、そのいずれもが、具体的故人、先祖、水子といった者に対する供養をこの寺で行なうようアドバイスを受けたものであった。

例えば、「父が寝たきりとなり、母も高血圧、そして姉も離婚するなど不運が続いた。そこでオガミヤに拝んでもらったところ、以前、父のオジの位牌をうちで祀る約束をして祀っていたが5年前から寺に預けてしまったのでオジが祟ったことが判明し参詣した」(市内、男、46歳)というように、なんらかの事情で浮かべられない仏がいることが判明したので、この寺で供養して来いというものであった。こうしてみると、旧因幡国において供養の「祈り」がなされる背景には、前述したような様々な慣習を規制する「一するものだ」といった<伝承>が作用している他、ここにもみるように、摩尼寺に対する信仰を積極的に方向付けるように働く、オガミヤの力も作用しているものと考えられよう。

V. まとめ

さて小論においては、摩尼寺を事例として<檀家を持たない寺院>でなされている仏教信仰のあり方を、そこへと参集する人々の関わりの方から探ってきた。その際にはまず、祈禱と供養それぞれの法会及び任意に提出される写経を取り上げ、摩尼寺側の資料である

『回向控』、『祈禱控』、写経感想文の分析を行った。またさらに平行して法会当日にアンケート調査を実施し、本堂内にもアンケート用紙を常置するなどして、できるだけ多くの角度からこの寺への人々の関わりを押さえるべく考察してきた。今まで述べてきた結果をまとめるなら、以下の点を指摘することができよう。

1. 摩尼寺に関わりを求める人々は、いかなる参詣の機会にあっても、超宗派的に参集しており、天台宗の教義は取り立てて意識されていない。

2. 「摩尼寺主催の行事に参加する場合」には、そこで祈られる参詣者の「祈り」は、その法会の趣旨に則ったものに限られている。それに対し、「＜その都度的関わり＞が持たれる場合」には、そこでの「祈り」の内容は多岐に亘ることとなる。しかしその内容は全く無限定に広がっているわけではなく、摩尼寺の寺院行事の法会の目的と同じ、故人の供養や病氣平癒などを中心に、ある程度方向性が定まっているものと考えられる。

3. また摩尼寺に対する「祈り」の内容には、参詣者の年齢、性別、居住地域によって傾向の違いが見いだされる。年齢の点からいうなら、祈禱の「祈り」は広く見いだされるのに対し、供養の「祈り」は中高年齢層に多くみられた。また供養の「祈り」の場合は、男に比べ女に顕著に見られた。さらに病氣平癒などの祈禱の「祈り」は広い地域から見られたのに対し、供養の「祈り」は旧因幡国に限られていたことが特徴的であった。

4. 以上のうち年齢や性別による傾向の差異が生じる理由に関しては、「祈り」の内容自体が持つ特質が考えられる。また「祈り」の持つ地域性に関しては、摩尼寺参詣者の間で

地域によりこの寺の持つ職能、あるいは利益に対し、ある程度明確なサンクションが持たれていることが推察される。その点が旧因幡国の参詣者にのみ供養の「祈り」を捧げさせることとし、さらに数ある現世利益の「祈り」の中でも、祈禱の「祈り」はある程度限られた内容にまとまっているのである。一般によく聞かれる五穀豊饒や商売繁盛の「祈り」が、農業従事者の参詣が多いにも関わらず、ここでは一件も見いだせない点はそのことを物語っているものと思われる。

5. そしてその様なサンクションが定着していくためには、それぞれの地域でパーソナルなコミュニケーションとして伝達されていく、＜伝承＞による規制が窺われ、さらに加えてオガミヤと呼ばれるような民間宗教者の指導も影響力を発揮していることが明らかになった。

最後になったが、本稿を作成する上で摩尼寺の柴田昭正師からは多大なご協力、ご教示を受けた。またデータ収集に際しては、それぞれの時期に教育学部社会科研究室に所属していた大西啓子、春日宏、花谷久美子、岡利行、池田真澄、柴田文子、福間勉、山根伸一の諸君の協力を得た。記して深謝する次第です。

なおこの報告では、筆者が昭和58年度科学研究費補助金（奨励研究(A)）の援助を受けて行なった調査の研究成果の一部を使用した。

註1) 人の「祈り」を他人が正確に知ると言うことは、非常に難しいことである。筆者がここで取り上げた「祈り」の材料は、摩尼寺へと参った人々に面接し、直接何を祈ったか聞いてその回

答を資料として用いたが、その名も“Das Gebet”（『祈り』）という著書を著した宗教現象学者 Heiler F. によると、このように「祈り」を思いだして書き付けた資料は、「祈り」の現場を直接見聞した第三者により書き取られた資料に比べれば劣るものの、「祈り」の分析をする上では有効な材料であるという。

(Heiler, F. “Das Gebet” 1922 S.28.)

- 2) 寺院の分類は様々にやられてきたが、よく取り上げられるのは、寺院の果たす機能から行なうもので、祈禱寺・回向寺・学問寺・観光寺の4種にわけたものであった。(例えば、藤井正雄、『日本人とご利益信仰』講談社、1986、P.2)しかしこの分類で現実の寺院を見ていく場合、1つの寺院は必ずしもそのいずれかに分かれるとは限らず、時には複数の「顔」を持つ場合もあり、類型としては有効とは言えない。そこで本稿においては便宜上、寺院をその運営形態から類別し、檀家の有無を基準として採用した。
- 3) 藤井学、「江戸幕府の宗教統制」『岩波講座日本歴史』11巻、岩波書店、1963、P.156
- 4) 摩尼寺に関する主な研究文献としては、以下のものがある。

宮地猛男、『山陰霊場摩尼寺』、博進堂、1912
田中新次郎、『因幡の摩尼寺』、鳥取民俗学会、1958

拙稿、「摩尼寺における死者供養の一考察」、
『山陰文化研究紀要』第24号、島根大学、1984
拙稿、「摩尼寺における死者供養の形態と構造」、
『山陰民俗』45、山陰民俗学会、1985

- 5) 前掲した宮地(1912) pp.8~24に享保年間の記録とされる「摩尼寺日用清規」が収録されており、当時の修行道場としての生活を窺い知ることができる。なおここに述べる摩尼寺の歴史の概略については、註4)で挙げた文献を参考にした他寺にある、弘化二年に書かれた『喜見山摩尼寺記録』(宮脇陽雄氏所有)のコピーを参考にした。
- 6) この法会については註4)で挙げた拙稿で詳述したことがある。本稿においては全体の脈絡上必要な部分を再録したが、以前触れられなかった資料も加えてある。
- 7) この点は特に拙稿(1985)で詳述した。
- 8) 宮地猛男、前掲書、pp.31~32
- 9) 現住職である柴田昭正師より伺った。